

国文学科(専攻)創立六〇周年
国文学会設立五〇周年
記念論文集刊行にあたって

廣 田 收

わが国文学科の歴史は、専攻として認可され開校した一九五四年から始まる。その頃一般教育を担当されていた南波浩先生が中心となり、学内の合意を得て文部省に設置を申請されたと聞く。当初夜間の第二部だけで出発した経緯、学内の手続きに伴う困難、博士後期課程設置の断念、専門委員の審査のようすなど、大変な御苦労でもってようやく開校にこぎつけたということを、ことあるごとに南波先生からうかがった。その後、一九八五年に博士後期課程が設置された。その間の顛末については記憶に新しいが、今は措こう。

ともあれ、南波浩・土橋寛両先生を始めとする先生方が専攻の第一次世代であるとすれば、今や国文学科の教員は、その警咳に接しえた第二次世代へと入れ替わっただけでなく、すでに第三世代へと移行しつつあるといえる。

さて昨二〇一三年度は、創立一三八年に及ぶわが同志社大学の長い歴史にとって、大きな節目であった。振り返れば、一九八〇年代に一年次・二年次の教育を京田辺校地で行うことが準備され、紆余曲折の後に実施された田辺移転の後、文学部も二校地に分割されたままの時代が長く続いた。この二校地体制は、専門教育・専門研究の立場から言えば、結果的には学生にも教員にも負担の大きい時代であった。

今こうして文学部が再び京都市内に戻ってきた現在、研究・教育環境もこれから少しずつ整備されて行くで

あろう。特に喜ばしいことは、学部一年次生から大学院生までが、再び同じ校地で学ぶことができるようになったことである。これまでもまして、教員からの一方的な指導ではなく、学生が相互交流の中で主体的に学ぶことのできる環境の整備を、どのように具体化して行くのが問われるに違いない。かつての国文学専攻が、文学部の改組転換に伴い、二〇〇五年四月から国文学科に昇格したことは慶賀すべきことであるが、全国の大学から国文学や日本文学という名称が消えつつある時代に、これからどのようにして新たな研究・教育の可能性を開いて行くのか、これからが本当に大学の実力が問われる時代となるだろう。

一九六五年に設立された、わが国文学会も同様である。主たる研究・教育の場が今出川校地へ戻ったことを機に、学会の活動を活性化するにはどうすればよいのか。研究発表会や講演会のみならず、今後さまざまな工夫を重ねることによって、学会の活動がもっと充実したものになって行くように努めたいと願うものである。とりわけ、この記念号に卒業生で高名な研究者とられた諸先輩から、活躍中の新進気鋭の方々に至るまで、これほど揃って御寄稿いただけただけことは誠に喜ばしいことであり、僭越ながら会を代表して心からの謝意を表したい。この記念号が国文学会の成果の一端を示すものであるだけでなく、今後の研究・教育を切り開く可能性を示すものであってほしい。同時に、諸賢におかれては今後とも変わらず国文学会に御叱正を賜りたいと切に願うものである。